

# ベル『若き日のパン』試論 ——市民社会に秘められた憎悪のからくり——

木本 伸

## 1. 作者の視点

1954年、リバプールからの蒸気船に乗った作家ベルはアイルランドへと向かった。ここで数ヶ月を過ごした彼は、貧しくも慎ましく、そして何よりも敬虔な人々の生活にふれて、深い感動を覚える。その記録は、帰国後に『アイルランド日記』としてまとめられた。そこでの彼の体験は、アイルランドと母国ドイツとの落差なしには考えられない<sup>1</sup>。50年代前半のドイツは、戦後の瓦礫を残しつつも、すでに急速な経済的回復への途上にあつた。人々は過去の悲惨や殺戮を忘れ、より快適な生活のために未来を目指して生活していた。そうした社会状況において一種の違和感を覚える人は、実際には少なくないのだろう。だが、それを明瞭な言葉で捉えることは至難である。たいていの人は、なんとなく首を傾けながらも、自分も汽車に遅れないように先を急ぐのである。そうしたドイツをつつむ捉えようのない苛立ちの中で、ベルはアイルランドへと旅立った。そして、そこで彼はドイツとは異なる他者を発見したのである。

ところでアイルランド滞在中に、ベルは新しい小説を書き進めていた。それが『若き日のパン』(1955)である。この小説では彼が身を置いたアイルランドの匂いは、まったく感じられない。そこで彼が描いたのは、ドイツの経済復興を懸命に生きる一青年の姿だった。だがドイツの内側からドイツを描いたこのテキストは、アイルランドという他者なしには考えられない。『アイルランド日記』で母国の実状が語られないように、『若き日のパン』ではアイルランド体験を直截に示唆するような記述は見られない<sup>2</sup>。それは、まさに二つの著作が互いに照射し合う対関係にあるからだ。つまり、この小説で描写されるドイツ社会とは、アイルランドという他者の視点から発見されたドイツなのである<sup>3</sup>。

テキストの成立根拠ともいえるべき、この認識構造は、テキスト自体の骨格にも組み込まれている。つまり経済復興の申し子のような青年のところに、ドイツの現状の中で圧殺されそうなアイルランド的契機が芽吹くのである。それによって彼は社会に対する総体的認識を獲得し、これまでの人生と訣別することになる。このテキストの構造について、次に物語の内容に即して考えていこう。

## 2. 正午の出会い

物語の主人公はヴァルター・フェントリヒ、23歳の青年である。彼は16歳まで郷里のクノホタで父と過ごし、ギムナジウムを中退した後、今はライン沿いの大きな街で、一人で生活している。徒弟寄宿舎に入った当初は、彼は仕事を2ヶ月毎に4度も替えたというが、今はようやく洗濯機の修理工として落ち着いている。物語で描かれるのは、1950年代前半の3月14日、ある月曜日の日である<sup>4</sup>。

この日には一つの出来事が待ち受けていた。父の同僚の娘が教育大学に入学するため、ヴァルターの街へ引っ越して来るのだ。彼女のために適当な住いを探した彼は、この日の正午には、彼女を駅へ迎えに行くことになっていた。この出会いは、ヴァルターの人生に大きな転機をもたらすことになる。これを機会として、彼は自分の生き方とその背景にあるドイツ社会を別の角度から眺めるようになる。それは物語の流れにおいても最大の転回点である。そのため作者は、この出会いが若き日の客気ではなく、ある種の必然性の促しによることを示すために、語りの方に工夫をこらしている。

ここで作者は青年の一人称による描写方法を採用する。それは彼の胸裏を微細に跡付け、その内面的成長を描くのに最適の方法だった。まず一人称話者は、みずから物語の一日を刻々と体験していく。いつものように床から身を起し顔を洗うまでに、すでに様々な思いが頭をよぎり去っていく。そうした想念には何らかの脈絡があるのかも知れない。だが現実の直中にある人間は、そこで立ち止まることはできない。また現実の中では立ち止まり考えたことさえ、次の瞬間には時間の波間へと消えてしまう。しかし意味を突き止めることなく過ぎていく朝の時間の中で、彼は微かな苛立ちを覚えている。この苛立ちの背景には、今朝という一点に集約された彼の半生があるのだろう。そして苛立ちが焦点を求めて身を振るところに、正午の出会いが生れるのである。その意味で、彼女を見たとき彼が一目で打たれた「愛の稲妻」(Liebesblitz)とは、実は「認識の稲妻」(Erkenntnisblitz)<sup>5</sup>に他ならなかった。これを彼は次のように述べている。

彼女がどれほど美しいか、これまでだれ一人気づかなかったとは私には信じられなかった。(…)もしかしたら彼女は、私が彼女を見つめた瞬間に初めて生れたのかも知れなかった。(vielleicht auch war es so, daß sie in dem Augenblick erst da war, als ich sie ansah.)(47f.)

こうした出会いに至る内心の過程を、読者は一人称話者とともに体験していく。それによって人生の岐路を踏み越えていく主人公の歩みが、おのずと追体験されるのである。

しかし一人称形式には難点もある。それは事象の描写が語り手の視野に限定されるため、すべてが灰色の独白へと呑み込まれやすいことだ。また日常の些事や苛立ちが一つの認識へと集約されていく過程は、この認識以前の立場では明瞭には捉えられないだろう。そのため一人称話者の現在の視点に止まる限り、認識の稲妻は現われ難いことになる。そこで作者は

一人称形式を堅持しつつも、一人称話者の現在を彼自身の将来の視点から照らし出すという方法を工夫している。つまり物語で描かれる一人称話者の世界は、出会いが生み出した彼の第二の目によって再構成されているのだ。すでにテキストの一頁目の言葉には、こうした語りの構造が示唆されている。

後になって、私はよく考えることがあった。もしもヘートヴィクを駅へ迎えに行かなかったとしたら、すべてはどうなっていたらどうかと。まるで別の汽車に間違えて乗り込んでしまうように、私は別の人生に乗り込んでいたことだろう。それはヘートヴィクと知り合う以前の私には、まずまずと思われた人生だった。(8)

こうして読者は主人公とともに物語の一日を体験しつつ、水の流れが滝へと近づくように、出会いの瞬間へと引き寄せられていくのである。

主人公ヴァルターを一変させるヘートヴィク体験は、様々な意味でテキストの中核に位置している。ベルはあるところで、「理想を言えば小説は一分間で描くことができねばならない」<sup>6</sup>と述べているが、『若き日のパン』で、この一分間に相当するのが出会いの場面であることは確かだろう。この二人の出会いが一日の正午に設定されていることは、作者の意図を感じさせる。正午とは一日の折り返し地点に他ならない。そこで青年は人生の転機となる認識の南中を迎える。これを通過することで、彼は日の出の勢いで経済的成功を求めた前半生から、夕日を思わせる静けさで、それを反省する後半生へと移ろうのである。その意味で正午の出会いとは、まさに「物語の正午」に他ならなかった。

このヘートヴィク体験は、作者の動機を考える上でも鍵を与える。それは前節で考えた彼のアイルランド体験とも近いものであったはずだ。『若き日のパン』を恋愛小説とみなす限り、断片的にしか描かれないヘートヴィクという女性像の意味は謎である。なぜなら彼女は、作中におけるアイルランド的契機に他ならないからだ。このアイルランド的視線を通して、経済成長を基本軸とする戦後社会で「まずまずと思われた人生」の実相が描かれていくのである<sup>7</sup>。それでは実際にヘートヴィク体験とは何であり、それによってヴァルターは、どのような現実を目にしたのだろうか。

### 3. 経済社会における現在の傷痕

この日までヴァルターの生活は順調だった。洗濯機の修理工として工場主と顧客の信用を集める彼は、休日も返上して一日12時間も働いていた。仕事に追われる彼の唯一の楽しみは、ウラやヴォルフと連れ立って喫茶店へ行くことである。ヴォルフは工場主の息子にして同僚であり、工場主の娘ウラとヴァルターは事実上の婚約者とみなされている。ここからも彼の生活が仕事一色だった様子がわかるだろう。

こうした彼の日常は、当時の社会状況とも大いに関連している。ドイツの経済復興は、冷蔵庫、洗濯機、テレビ、自動車の順序でヒット商品を生み出し、テキストで描かれる50年代

前半は、洗濯機が爆発的に生産された時期に当たっていた<sup>8</sup>。物語の主人公は、23才の若さで、すでに小さなクルマ(31)と1710.80マルクの貯金(52)を所有している。それはドイツの経済成長のひとこまに他ならない。こうした日々は、彼の言葉によれば「すべてが、まったくまずまず(alles ganz passabel)」であり、彼は「自分の値段、つまり自分の両手や技術の値段、ある種の経験の値段、得意先との好ましい関係の値段を所有していた」(31)。さらに将来は工場主からの独立をもくろむ彼は、「この値段(Preis)をますます高めることができた」(32)のである。

いわばヴァルターは有望な青年である。しかし彼は現在の生活に、どこか満足できないものを感じていた。この微妙なゆらぎは、先の「まずまず」という言葉からも読み取れるだろう。そもそもフランス語の”passer”に由来する”passabel”は、「通行可能」(gangbar)というほどの意味である<sup>9</sup>。たしかに現在の彼の生活は、ドイツ社会において「通行可能」である。この生活の延長線上には、たしかに一定の成功が約束されている。

しかし”passabel”には、同時に”leidlich”や”erträglich”とも重なる抑制的な意味合い(「まずまず」)がある。それは表面的には、現状に満足せず、より大きな成功を目指す彼の性格を示している。実際に、ヴァルターは休みなく働き続けている。しかし、この行程には終りがあるのだろうか。彼が目指す未来の幸福などは、本当は幻想かもしれない。そして幻想を暴かれないうちにこそ、経済社会は拡大再生産を必要とするのかもしれない。そのとき最大の問題は、未来への通過点として棚上げされた現在の満足は、いつまでも来ないということだ。つまり「まずまず」という言葉には、経済社会における現在の傷痕が隠蔽されている。それは満足を偽装しつつも、実は恒常的な不満を洩らした言葉なのである。

それでは、なぜ彼は未来の幻想のために現在を消費するのだろうか。そこには美しい未来を夢見ずにはおれない、現実の悲惨があるのではないだろうか。こうした現実の構造を、次に主人公の人生を振り返りながら考えていこう。

#### 4. パンへの執着

テキストで追想される主人公の過去は、ギムナジウムに始まる。そこには挫折の思い出があふれている。優等生に嫌われたり(37f.)、放課後の職員室で成績表を盗もうとして失敗したり(12)、彼には、ほとんど芳しい記憶がない。そして落第を重ねたあげく、ヴァルターは学校を中退してしまう。それから彼は都会の徒弟寄宿舎に身をよせ、就職先を捜していた。その頃11時になっても寝床にいる彼を見つけては、宿舎の掃除婦は「あんたはものにならないよ(Aus dir wird nichts.)」(16)と罵倒していたという。

そんな彼の転機となったのが、現在の仕事との出会いである。そこで彼は自分でも驚くほどの執拗さを見出す。彼は新しい機械に取り組むや、それを夢に見るまで没頭した(76)。それが現在の修理工としての土台となったのである。それでは信頼される技術者となったヴァルターは、以前の怠惰を克服したのだろうか。テキストの冒頭にある目覚めの場面は、むしろ彼の胸に巣食う情念の連続性を暗示している。

ヘートヴィクが来た日は月曜だった。この月曜の朝、大家の女性が父からの手紙をドアの下へと差し入れたとき、私はまだ、以前に徒弟寄宿舎でそうしていたように、できれば顔の上まで毛布を被っていたかった。(7)

温かい毛布にくるまれた彼は、かつての無気力な青年を思わせる。しかし、以前なら毛布を被り続けていた彼は、今日は疲れを押して仕事へと出かけていく。そこには勤勉と怠惰という相反する性格の違いがある。それではヴァルターの現在と過去に共通する情念とは何なのか。それは今も癒されない空腹の記憶だった。

このテキストでは戦後の悲惨が直接的に言及されることはない。そのすべては、ただ主人公の空腹(Hunger)によって表現されている。技術者として成功するまでの彼の空腹は、すべて直接的だった。学校給食のスープ(12f), パン屋の知人(13), 教会病院で炊事係を務める修道女(21)。あらゆる関係を利用して彼は食物を食った。宿舎への父の送金も、すぐに闇市でパンへと替えられた。それは計画的な食料の調達などではなかった。あまりに多くのパンを一度につめ込んだ彼は、宿舎の夕食は他人にゆずってしまうのである(25)。こうして手に入れたパンの様子を、彼は次のように描写している。

ときには、それはまだ湯気を出し、本当に温かだった。私は瞬間的に生き物(ein lebendes Wesen)を手に乗え、引き裂いているような気分になった。そして私は北極探検について講演した男のことを思い出した。その男はこう語ったのだ。彼らは生きた魚を引き裂き、生のまま食ったと。(25)

ヴァルターは「自分の中のオオカミめいた何か」(etwas Wölfisches in mir)(20)に気づく。彼はパンのことしか考えられない。そしてモルヒネ中毒に準えて、自分を「パン中毒」(brotsüchtig)(20)と呼ぶのである。

しかし戦後の復興が進むにつれて、人々は物資に恵まれた。それとともに主人公も直接的な空腹から解放された。だが彼はまだ、空腹の記憶を引きずっている。彼はパン屋の硝子ケースに美しいパンを見つけると、「あのオオカミのように飢えた日々の不安の記憶」(20)に襲われて、思わず買い込んでしまう。そして四半分も食べ切れずに、大家の一家に与えてしまう(20)。それは青年にありがちな精神的外傷の一つだろうか。たしかに彼の生活から空腹は消え、ささやかな地位と収入がそれに代った。だがパンへの執着は生き続けている。空腹の苦しみとは、現実的にはパンを買えない苦しみである。その意味で、彼は「空腹が私にもの値段を教えた」(Der Hunger lehrte mich die Preise)(20)と告白する。ここには戦後の飢餓が、あくなき経済成長へと変貌するからくりが示されている。

ヴァルターの仕事ぶりは、より大きな収入を目的としている。すきあらば顧客から必要以上の出張料を要求することさえ彼は恥じない(36)。機械への関心も、彼の場合はカネへの関心

と不可分である<sup>10</sup>。かつてパンのことしか考えられなかった青年は、こうして今はカネのことばかり考えている。最低限の衣食を確保することは、だれしも必要だろう。だがヴァルターの欲求には制限がない。その意味で彼の実態は、相変らずオオカミの比喻にふさわしい。だが、その野性は、普段は良き市民の仮面によって隠されている。そのため彼の言う通り、「だれも私の中に巢食うオオカミを気づき知る様子はなかった」(23)。しかし彼自身も自分の中のオオカミを予感しているに過ぎない。表面的には善良な市民である以上、その背後に秘められた欲求は、本人にも容易には気づかれないのである。

ただ彼の中のオオカミは、時折、うなり声をあげる。そして周囲を徘徊する他のオオカミに鋭く反応する。例えば彼は恋人とキスをするとき、「つややかできれいな少女の顔の下にどくろ(Totenschädel)」(99)を意識し、ダンスをするとき「私の腕や肩に置かれた小さな可愛い手が、私からパンを奪うことになるだろう鋭い爪(Kralle)へと変貌する」(33)様子を垣間見る。それらは、すべて「まずまず」と呼ばれた社会生活の一部だった。だが、その真相は、まだ明瞭には知られていない。それは社会を極度に対象化しうる、ある出会いを俟って可能になるのである。

## 5. 父

テキストの中心点は正午の出会いにある。それはテキストにおいて作者のアイランド体験が集約的に表現される場所である。この出会いによってヴァルターの社会認識は一変してしまふ。だが、それほど出会いが、何の準備もなく突然に訪れるだろうか。日常的な異性との出会いでも、それを待ち望む気持がなければ成立しない。ましてや認識の稲妻と呼ぶべき邂逅は、その認識まで成熟した受け手でなければ不可能だろう。ならばヘートヴィクを通じて彼に芽生えた認識の種子は、すでに出会いに先立って用意されていたはずだ。そうした荒地の開墾のような役割を果たしたのがヴァルターの父だった。

ある時期、彼は空腹に駆られて父の蔵書を盗んでいた。ギムナジウムの語学教師である父は蔵書家だった。それは父が「学生時代に飢えを凌いで買い集め、愛した本」(119)だった。恋人ウラとの別れの場面で、父の蔵書についてヴァルターは次のように述べている。

俺は手当たり次第に本を奪った。ただ厚さだけで本を択んだ。親父は沢山持っていたから、俺は気づかれはしないと考えたんだ。——やっとなんて後になって、俺は知った。親父は牧者が羊の群れを知るように、どの一冊のこともよく知っていたんだ。(119)

その結果、みすばらしい一冊の本を「貨車一杯分のパンほども価値がある」(119)とは知らずに、彼はマッチ一箱の値段で売り払ってしまう。そのとき父は、これから本の売却は自分に任せて欲しいと恥じらいながら申し出た。そして父は本を売り、息子に送金し、そのカネで彼はパンを食い続けた。

その後も、父は惜しげもなく息子のために食物を与えた。残念ながら父が実家で手ずから与

える食事は、一度もヴァルターの口には合わなかった(24)。しかし父の態度は、息子に不思議な罪の意識を芽生えさせた。例えば父に都会の様子をたずねられ、パンやバターの値段を教えたり、自分の空腹について口をすべらせるとき、なぜかヴァルターは「不正を犯したような気持」(das Gefühl, ein Unrecht begangen(…)zu haben)(24)になった。この罪の意識は、社会道德の次元から由来するものではない。例えば見習い時代に工場で盗んだフライパンについては、ヴァルターは全く反省していない。彼は教師の卵であるヘートヴィクに対して、この事件について自分は「後悔など跡形もない」し、それどころか「いまなら、もっとうまくやって見せる」(88)と告白する。それは、この窃盗がパンに飢えたオオカミの社会で、パンゆえになされた行為だったからだ<sup>11</sup>。

だが彼は父の前では罪を感じる。それは父が愛情のパンを与える人だからだ。彼の帰省前には、いつも「息子と話す」(76,137)と書かれた紙切れが父の札入れに挟まれていた。彼にとって父親は「その敬虔さが納得できる唯一の人」(74)であり、その蔵書の「牧者」(119)だった。他方でヴァルターはオオカミである。たしかにオオカミの社会でオオカミであることは、何ら罪に値しない。それどころか有能な略奪者であることは、地位と名声に値する。しかし父の前では、彼はその愛情を貪るものであり、罪の存在として自己を見出すのだ。この父とヴァルターの関係は、ヘートヴィクとヴァルターの関係の原型をなしているだろう<sup>12</sup>。

## 6. ヘートヴィク

父からヘートヴィクへ。父が息子の中に撒いた認識の種子は、彼女との出会いによって芽生えることになる。このテキストをつらぬく縦糸は、すでに冒頭の場面で明瞭に示されている。この朝、惰眠を貪りかけていたヴァルターは、一通の手紙で目を覚ました。それは認識の南中を迎えるにふさわしい一日の始まりだった。

しかし廊下で大家が叫んだ。「手紙が来ていますよ、実家から。」そして彼女が手紙をドアの下へと差し入れ、まだ私の部屋に漂う灰色の陰の中へと手紙が雪のような白さで滑り込んできたとき、私は驚いてベッドから跳び起きてしまった。私はそこに郵便局の丸いスタンプではなく、鉄道郵便の楕円のスタンプを見つけたのだ。(7)

父が電報や速達をよこすのは、7年間の都会生活の中で3度目のことだった。以前の2度の手紙は、どちらも尋常な知らせではなかった。1通目は母の病死を告げるものであり、2通目は父の大怪我の連絡だった。3通目の速達にヴァルターが驚いたのは当然である。

しかし手紙の内容は、ひとまず彼を安堵させた。そこには「同僚の娘ヘートヴィクが11:47の汽車で到着する、忘れずに迎えに行くように」という趣旨が事務的に記されているだけだった。それは日常の些事に属する事柄だろう。しかし父の使者であるヘートヴィクは、彼に日常の意味を根底から問い直す機会を与えることになる。それはヴァルターが我知らず求めてきた問題だった。日常の直中にある人間は、日常の意味を知ることはできない。そこには

自己の意味から閉ざされた存在の暗さがある。この認識の暗さを払拭するのは他者しかない。まどろみに包まれた下宿の「灰色の陰の中へ」(in den grauen Schatten), 父の手紙が「雪のような白さで」(schneeweiß)差し入れられた, という色彩表現は, ヘートヴィクとヴァルターの認識関係を見事に示している。

父の手紙の白さは, ヘートヴィクの色でもある。彼女との出会いは圧倒的な色彩感覚で溢れていた。そこで使われる色彩は生命と認識の確かさに通じている。彼は駅のホームでカバンに腰掛けた少女を見つけたときの印象を, 次のように語っている。

彼女は褐色の髪(dunkles Haar)を持ち, 彼女のコートは暖かい雨夜に萌え出た牧草のような緑色(grün)だった。それは牧草の匂いが感じられるほどの緑だった。彼女の髪は雨にぬれたスレート屋根のように褐色(dunkel)で, その顔は白く(weiß), 黄土色(ockerfarben)に微光を放つぬりたての漆喰のような目を射る白さ(grellweiß)だった。私は一瞬, 彼女は化粧をしているのだろうと考えたが, そうではなかった。私はただ, この目を射る緑色(grellgrün)のコートを見た, この顔を見た。(…)この顔は深く私をつらぬいた。銀地金ではなく蜜蝋へと当てられた鑄造棒のように, それは私を打ち抜いた。(43f.)

この場面を決定する色彩は緑と白だろう。この二色に秘められた衝撃力が, 出会いの瞬間にヴァルターを射抜いたのだ。それでは緑と白は, それぞれ何を象徴しているのだろうか。まず緑は「暖かい雨夜に萌え出た牧草」に喩えられるように, 新鮮な生命の表現だろう。この匂い立つ牧草のイメージは, それが都会の駅の雑踏に置かれた様子を考えれば喚起力をます。それは彼にとって, 一瞬にして駅の構内が色を失うほどの衝撃だった。

この緑の生命感を補足的に方向づけるのが白である。ヘートヴィクは二十歳になったばかりだ。しかし彼女は若々しい女性の美しさで描写されることは少ない。むしろ母性を連想させる大きさや強さで描かれる傾向にある。例えば, 駅を後にした二人がクルマに乗り込む場面では, 「私は初めて彼女の手や彼女の肘にふれた。それは丸くて力強い肘であり, 大きくもかろやかな手だった(es war ein runder, kräftiger Ellenbogen und eine große, aber leichte Hand)」(46)と述べられる。また彼女は背丈も「私と変わらないほどの大きさ」(85)であり, 夜の下宿で彼女を大家に紹介する場面では, 彼は二人の女性が握手するとき「ヘートヴィクの両手がいかに大きく, いかに白く, いかに力強いか」(137)を確認する。ここでの白さは, 少女というよりも聖母の無垢を連想させるだろう<sup>13</sup>。

ヘートヴィクの母性と生命感。それは認識の稲妻となってヴァルターを襲った。しかし, その衝撃は彼女の存在だけでなく, それを通して彼が発見した自己の現実にも由来している。かつて父の愛情によって貪りの自己が問われたように, ヘートヴィクとの出会いは彼に新たな自己認識を与えたのだ。それでは彼は出会いの瞬間に何を見たのだろうか。



## 7. 出会いの意味

駅で彼女を待ち受けていたとき、ヴァルターは以前の記憶や手紙に従って、彼女の姿を想像していた<sup>14</sup>。その女性像には、彼の日常の風景が投影されている。

私はブラットホームへの階段に足をかけながら考えた。二十歳、金髪、教師になるために都会に来る。こうして自分の側を通り抜ける人々を眺めていると、私には、この世界が二十歳の金髪の少女で溢れているような気がしてきた。——これほど多くの人たちが、この汽車から降りて来る。彼らはみな手にカバンを持ち、教師になるために都会へ来るのだ。(43)

人込みの中でたたずむ彼には、すべての人が金髪の教員候補に見えてしまう。それは目前の人々に対する無差別な認識だろう。これは彼の日々の生活とも関係している。つまり駅で休みなく行き交う汽車や大量に乗降する人々の群れは、巨大な経済社会のひとつまに他ならない。そして彼の無差別な認識は、めまぐるしく売買される全商品が実は同一の表情を持つという、経済社会の悪夢に由来している<sup>15</sup>。この経済社会の悪夢は、これまで曖昧な予感の中で眠り続けていた。しかし彼女の母性の輝きに打たれたとき、彼は灰色の日常から一瞬にして目覚めたのである。この認識は、午後の時間の中でさらに深められていく。

駅のホームで声をかけたヴァルターに、ヘートヴィクは自分の新しい住所をたずねた。そのとき彼女が口にした「ユダヤ人街」(Judengasse)という言葉は、彼を動揺させた。「私は夢の中で自分の名前を呼ばれたような気がした」(44)と彼は言う。ユダヤ人差別の歴史では、ユダヤ人は職業や思想や性別を問われることなく、宗教や人種という一属性だけで排除された。ヴァルターが先の言葉に身震いしたのは、そこに無差別な認識が生み出した歴史的現実を垣間見たからだ。それは過去の出来事ではない。「あの頃、まったくまずまずと思われた人生は地獄(Hölle)を生み出しただろう」(8)という彼は、そこに、みずから作り出し、みずから住人となる地獄を見たはずだ。

こうした現実には彼は改めて直面する。彼女の下宿で二人きりになったとき、彼は彼女への愛欲に駆られた。そのとき彼は、以前に工場で働いていた工員の話を生々しく想起した。

彼はグレーミヒという名前で、背が高くやせていた。その前腕には手榴弾の破片で沢山の傷痕があった。彼は戦争中、たまに女をものにするるとタオルで女の顔を覆ったという。私は自分が彼の話怖れなかったことに驚いた。グレーミヒの話の恐ろしさは、手に花を持ちヘートヴィクの前に立った6年後の今になって私を襲った。(54)

タオルで顔を覆うということは、相手を愛欲の対象として無名化することを意味している。そこにはユダヤ人大量虐殺に通じる恐怖がある。なぜなら大量虐殺の恐ろしさは、個々の死に名前がないところに存するからだ。この恐怖は、平穏な日常にも秘められている<sup>16</sup>。例

えば、これまでヴァルターは衝動的にパンを求めてきた。そのとき胃袋に押し込まれるパンは個性を剥奪されている。この無名化の地獄から救われる道は、事物との出会いしかない。その出会いには、ささやかな個性の発見があるはずだ。次の瞬間に、彼はタオルを使ったグレーミヒは「決して例外ではなかった」と気づく——「彼は女の顔にかけたタオルの向うに美を探していたのだ。彼はタオルを取りさえすれば、美を発見できたのだ」(55)。

このタオルの彼方の美は、都会の駅で一人の少女に発見されたものと等しい。二十歳のヘートヴィクは特別な人間ではない。彼女は父親のすすめで教師になるために都会へ来た(92)。おそらく彼女は取り立てて美しくはなく、強烈に個性的でもないだろう。だが彼が彼女に発見した存在の輝きは、小さな灯りが漆黒の闇を破るように、灰色の日常全体を照らし出したのだ。それは彼にとって「美しくもまた異質な」(127)存在だった。いま彼女の下宿で、彼は自分とグレーミヒを重ね合わせている。彼の愛欲は、彼女に見えないタオルをかけようとしている。だがヴァルターは、彼女の表情に否定できない白さを発見した。それは永遠の母性である。この彼女の顔について、テキストの最後の一頁では次のように述べられている。

私は知った。彼女の顔は不滅であることを。私はまた彼女に出会おうだろう。顔をタオルで覆われた彼女に。それを彼女は突然に引き去り、自分の顔をグレーミヒに見せつけるだろう。ヘートヴィクの顔、それを私は自分の目で見ることではできなかった。夜がこれほど深いから。だが私は彼女を見るために、もはや目を必要とはしなかった。(140)

ここでタオルをかけるグレーミヒとは、将来のヴァルターに他ならない。二人の生活が始まれば、彼は何度でも見えないタオルを持ち出すだろう<sup>17</sup>。彼は目も利かない夜の闇にいる。それは自己の情念で相手をぬりつぶす愛欲の闇だ。この愛欲は女性だけではなく、パンやその他の事物からも個性を剥奪し、それによって自己をも無名化の地獄へと引き落してきた。そのすべてが彼女の前であらわたとなったのだ。彼女の白さは一個の母性に止まらず、すべての事物の個性の輝きを象徴している。この存在の世界を彼は深く内心に刻印した。その世界を想起するために、もう彼は肉眼を必要とはしないのである。

## 8. 市民社会に秘められた憎悪のからくり

事物を貪婪に飲み込んでいく愛欲。その営みは市民社会では剥き出しになることは少ない。なぜなら、それは通常は進歩や上昇などの美名で糊塗されているからだ。しかし獲物を前にしたとき、愛欲は思わずオオカミのような唸り声を洩らしてしまう。それは憎悪(Haß)の声だ。いわば憎悪とは、個性の輝きを吹き消していく愛欲の本来の名前に他ならない。まずヴァルターが自分の中に聞きつけたのも、不可解な憎しみの声だった。そして次第に彼は、経済社会の歯車も憎悪の力で回されていることに気づいていくのである。この憎悪の認識が深められていく場所は、仕事場である。一般的に情念は個人に属するものだ。それが社会的な広がりを持つことは、個人関係が社会関係によって規定される職場にお

いて確認されるのである。まず彼が憎んだのは工場主だった。すでに働き始めて「2ヶ月後には、私は彼の家の台所から流れる匂いのために、彼を憎んでいた」(23)。それはケーキやステーキなど、ヴァルターが口にできない食事の匂いだった。彼の憎悪をかきたてたのは、空腹という名の「私の中に巣食うオオカミ」(23)である。その憎しみは空腹と同様に明確で直接的だった。しかし空腹を癒す手段はカネしかない。そこでヴァルターは全力で働き始めた。かつてパンを求めたように、彼はむやみにカネを稼ぎ始めた。

ところで市民社会では、すべてが規則や約束によって運ばれる。ヴァルターも工場で雇用され、労働の対価として収入を得ている。工場の出納係を務めるウラによれば、「私たちはいつも賃金表以上に支払ったし、うちで働く工員は現物給与とお昼には無料スープを受け取った」(117)。それは合法的な経済活動のひとつまだろう。ここには憎悪が透明な規律へと転化されるからくりが示されている。はらわたを焦がすほどの空腹は労働のモラルへと昇華され、人々が自覚せぬまま市民社会を律していく。そこでは社会規範を守りつつ成功を求める人は、善良な市民と呼ばれる。例えば、工場主は「腕利きで、自分の手仕事に練達し、それどころか彼なりに柔和」(22)でさえある。だが裏面から見れば、それは我欲を隠した「合法的な詐欺師」(auf eine legale Weise ein Betrüger)(60)に他ならない。その意味で、ヴァルターは工場主を「敬虔にして悪党」(63)と呼ぶのである。

こうした社会では、利潤を追求するために合理性が重視される。それを象徴するのが「安い」(preiswert)という言葉である。ヴァルターは「安い」を連発する人間を反射的に憎んだ。その代表は工場主(22)であり、また娘の下宿を探すヘートヴィクの父(19)だった。彼らの物言いは、利益を狙うオオカミの「責めるような言外の響き」(19)があった。この経済社会における安さの追求は、冷徹にして残酷である。そこには血の匂いさえ感じられるだろう<sup>18</sup>。ある事件を機会として、彼はこの経済的合理性の正体に直面することになる。それはヘレーネという少女の死である。ヘレーネは工場で彼にパンを分け与えた数少ない一人だった。彼女が死んだとき、彼は一週分の給料を花にかえて墓に捧げた。しかし工場側の対応は冷たかった。以下はウラへの言葉である。

君たちは彼女の葬式に花輪を送ることさえ必要とはしなかった。彼女の両親に悔み状さえ送らなかった。君は給料簿の彼女の名前の上に、赤インクできれいでまっすぐな線(mit roter Tinte einen sauberen und geraden Strich)を引いたのだろう。(114)

給料簿に引かれた「きれいでまっすぐな線」は経済的合理性を象徴している。その線の美しさは市民社会の美德に通じるだろう。だが赤インクには、隠された憎悪が見え隠れしている<sup>19</sup>。死んだヘレーネは、ヴァルターの父のように愛情のパンを分かち与える人だった。その死は、彼自身が加担する社会に秘められた悪意を鋭く彼に突きつけただろう。こうしてヴァルターは市民社会に秘められた憎悪のからくりを察知した。もう彼は現在の仕事に止まることはできない。喫茶店での別れ際に、ウラは彼を惜しんで言った——「だれが

見ても、あなたはこの仕事に打ってつけて、この仕事を愛していたわ」。彼は答えた。「俺はこの仕事を愛してはいない。ボクサーが殴り合いを憎んでいるように、俺はこの仕事を憎んでいる」(122f)。それは、これまでの生活からの訣別の言葉だった。

## 9. 永遠の月曜

社会の悪意に気づくにつれて、ヴァルターは、そこで抹殺された人々を発見していく。こうした人々の姿は、テキストのあちこちで散見される。例えば、フルクラールという青年のこと。フルクラールは工場の同僚だった。ある夜、彼は洗濯機の搬出に失敗して建物の四階から転落する。次の日、朝日に晒された死体には「この世界の正義など信じない飢えたものの口」(101)があった。それは剥き出しの愛欲と、その末路の姿だった<sup>20</sup>。

だが彼らを抹殺した悪意は、経済社会に特有のものだろうか。たしかに経済社会は、憎悪を冷徹な合理性にまで発達させた。しかし、それは本来歴史の底流を流れていたものではないのか。この憎悪の射程にヴァルターは目覚めていく。最後の一頁で彼は言う——「私はベツレヘムで虐殺された子供たちの叫び声を聞いた。その叫びにはフルクラールの死の叫びが交錯していた。それはだれも聞いたことのない、いま私の耳にだけ届いた叫びだった」(140)。ベツレヘムの事件は人類史をつらぬく悪意と残虐の象徴である。それと同じ悪意がフルクラールを殺し、この経済社会を動かしているのだ。こうした歴史の真相が物語の一日であらわになった。この作中の一日が月曜日であることは、偶然ではない。月曜日とは労働の日であり、その意味で憎悪の一日である。その限りで、「永遠とは一つの月曜日かもしれない」(die Ewigkeit müßte ein Montag sein)(133)とヴァルターはつぶやく<sup>21</sup>。

月曜日に安息はない。それでは永遠の母性はどこにあるのか。ヘートヴィクは、その不変の体現者ではないのだろうか。ところが作者は最後に至って、彼女に奇妙な動作を与えている。それは口紅をぬるヘートヴィクである。彼女はヴァルターの下宿やクルマの中で、「まだ唇が十分に赤くないかのように」(140)執拗に口紅をぬり重ねる。それは彼女の愛欲の表現だろう<sup>22</sup>。そのとき彼は「将来初めてわかるだろうことを、私は今わかってしまった」(140)と独白する。彼が駅で垣間見た永遠の母性は恒常的なものではない。それは彼女の生身において、いつも愛欲と同居している。二人の将来は、これからも月曜日だろう。その一日にヘートヴィクは唇を赤く染め、ヴァルターは何度でも愛欲に襲われるだろう。

だが月曜の直中で一つの認識が彼に訪れる。それは作中のアイルランド体験というべき認識の南中である。そのとき日常の底は拓かれ、そこから勝者の苦悶と敗者の呻きが一時に響きわたるだろう。そこには現在と過去への透徹した認識と哀悼がある。その意味で、それは私生活の領域に属しつつも、同時に歴史全体に関わるような瞬間である。戦後ドイツの経済成長。そこで作者はベツレヘムの子供たちの叫び声を聞き取った。それは物言わぬ人々の犠牲の上に築かれた繁栄だった。この経済成長という名の汽車をヴァルターは降りていく。その後で、彼がどこへ行くのかは定かではない<sup>23</sup>。ただそれは、知られざる死者との連帯の道であることは確かである<sup>24</sup>。

## 註

使用するテキストは次の通り。Heinrich Böll: *Das Brot der frühen Jahre*. 3.Aufl. Köln/Berlin(Kiepenheuer), 1959. 引用後の括弧内の数字は頁数を示す。このテキストの邦訳はない。そのため訳出は筆者による。

ベルによれば、アイルランドは「聖者たちの島」(13)であり、「ヨーロッパで侵略出兵をしなかった唯一の国」(15)である。そこは「地上で最も自殺者が少なく」(9), 乞食にも独特の美しさがある(24)。村の廃虚(45ff.)や出稼ぎの実態(125ff.)など、彼はアイルランドの悲惨にも言及する。しかし、そこには暖かい眼差しがある。このアイルランド礼賛は、母国ドイツへの批判の裏面とも言えるだろう。Heinrich Böll: *Irishes Tagebuch*. dtv 1957.

<sup>2</sup> 『アイルランド日記』でもドイツは話題にのぼる。英国の政治的宣伝に反対してヒトラーを擁護する酔っ払い(54)や、ドイツとアイルランドの慣用表現の比較(149ff.)などが、それである。だが50年代当時のドイツの様子が直接的に言及されることはない。それが暗示的に揶揄されるのは、唯一、次の個所である。「ある人がドイツで私に〈道路はクルマのものだ〉と言ったとき、私はそれを神への冒瀆だと思った。ところがアイルランドでは、私は〈道路は牛のものだ〉と言いたい気持になる」(60)。また戦後の世界的活況についても、次のように示唆されるのみである。「どこか西方4000キロの水の彼方と、どこか二つの海を越えた東方の彼方に、活動と進歩を信じる人々が住んでいる」(26)。これは地理的にアメリカと日本を指すものだろう。ここでドイツが登場しないのは、西側の経済社会とアイルランドとの生活感覚の距離を表現するためと考えられる。

<sup>3</sup> そもそも自己認識には他者なる契機が不可欠である。この認識論的問題については、すでにニーチェのテキストに即して考察したことがある。拙論：中期ニーチェ研究、「自由精神」による「確信」からの解放〔『ドイツ文学論集』第32号, 1999, 21-30頁〕。

<sup>4</sup> ヴァルターの履歴から考えると、物語の舞台は1953年か1954年になる。しかし3月14日が月曜日になるのは、1949年か1955年しかありえない。Vgl. Stone, Margaret: Heinrich Böll, *Das Brot der frühen Jahre*. München(Ordenbourg) 1974. S.50.

<sup>5</sup> Durzak, Manfred: Der unterschätzte Böll. Zu *Das Brot der frühen Jahre* und Veselys Verfilmung. In: *Lesen und Schreiben, Literatur-Kritik-Germanistik*. Hg.v. Volker Wolf, Tübingen 1955. S.31-42, hier S.38.

<sup>6</sup> Horst Bienek: *Werkstattgespräche mit Schriftstellern*, München 1962. S.145. ただし引用はStone, S.45による。

<sup>7</sup> ここで述べたアイルランド的契機とは、その内実から言えばキリスト教的契機に他ならない。その意味で『若き日のパン』を「キリスト教的観点からの存在解釈にして同時に時代批判」と理解するのは正確である。Kalow, Gert: *Die Liebe, der Hunger und der Rekonvaleszent*. In: *Text und Zeichen*. 1956. Heft 9. S.532-536, hier S.533.

<sup>8</sup> Durzak, S.37

<sup>9</sup> s. Etymologisches Wörterbuch des Deutschen H-P. Akademie Verlag Berlin 1989. Artikel: “passabel”, S.1237.

<sup>10</sup> ヴァルターは仕事上の集中力を父から譲り受けたと考えている。語学教師である父は、英語やフランス語の未知の表現を逐一集めていた。しかし父との違いも彼は意識している。それは父が「自分の発見に対してカネを取ることをまったく考えない」のに対して、彼の好奇心は「自分の知識でカネを稼ぐという欲求とつねに関連している」(76f.)ことである。

<sup>11</sup> 別れの場面で、かつての窃盗をウラに責められたヴァルターは「君や君の親父が俺に与えなかったパン」(117)のために盗んだのだと反論している。

<sup>12</sup> ヴァルターの父は、テキストにおけるキリスト教精神の体現者である。この父に与えられた精神の種子は、すでに息子の生活習慣の一部となっている。どれほど忙しくてもヴァルターは日曜の晩課(Abendmesse)だけは欠かさない(10)。それは仕事一色の日々において、それとは異質な世界へと通じる唯一の裂目だった。しかし洗濯機の修理のためにクルマで走り回る彼は、「たいていは遅れて」教会へ辿り着く。しかもベンチに座り込んだ彼は、疲れのために「ときには眠り込んでしまう」(10)。ヘートヴィクとの出会いの後で、彼は晩課への出席が「自分にとって言いようもなく大切なことだった」(63)と気づく。しかし正午までは、まだキリスト教精神は彼の中で「眠り込んでいる」(eingeschlafen)のである。

<sup>13</sup> 夕方ヴァルターと別れた後で、ヘートヴィクは一人で小さな教会へ入っていく。その後で、夜の街路に立ち尽くす彼女の顔は「もっと白く——痛ましいほど白い」(noch weißer——schmerzlich weiß)(126)と形容されている。

<sup>14</sup> ここでは以前に郷里で垣間見た記憶に従って、彼女は金髪だと予想されている。ヘートヴィクは、この誤解に対して「あの頃は金髪で貧血気味だった」(86)と説明している。

<sup>15</sup> ここでベンヤミンがニーチェの永遠回帰の思想について述べた言葉を紹介しておきたい。ベンヤミンは一切が無限の時間の中で何度も回帰するというニーチェの思想を、経済社会における商品の悪夢として捉えていた。これはヨーロッパのニヒリズムと取り組んだニーチェの核心にふれる批判とは言えないが、「市場の蠅」をさけて「孤独」を愛するツァラトストラの作者の一面を衝いた指摘ではあるだろう。「永遠回帰の理念は、泡沫会社乱立時代の悲惨から、幸福のファンタスマゴリーを魔術のように呼び出す。」「永遠回帰の思想が生じた時期は、自分たちが作り出した生産秩序の今後の発展をブルジョワジーがもはや正視する勇氣を持てなくなったときに当たる。ツァラトストラの思想と永遠回帰の思想、そして枕に刺繍された〈もう 15 分だけ〉という文句は同じ穴のむじなである。」ベンヤミン(今村仁司他訳)：パサージュ論 V (岩波書店) 1995, 40 頁。

<sup>16</sup> これと同一の事態を、別の作家にも語ってもらおう。こうした言葉は、実は 20 世紀文学のあちこちで散見される。それは、これが個々の作家の問題意識をこえた世紀の問題に他ならないからだ。「戦争は人間からその顔とその頭を奪わなかつただろうか？ 頭のない男どもが首を切られた女の断片に欲望を感じるような世界に、ぼくらは生きていないだろうか？」

ミラン・クンデラ(西永良成訳)：生は彼方に(早川書房)1992、40頁。

17 この引用文の後には、「まるで自分が他人のようにヘートヴィクへ襲いかかる様子を私は見た」(141)という言葉がある。

18 経済的合理性において自己完成する道具的理性(啓蒙)の暴力を指摘したのは、周知の通り次の書物である。Adorno/Horkheimer: *Dialektik der Aufklärung*. Frankfurt a.M. (Fischer) 1988. S.48f.

19 このテキストで「赤」(rot/blutrot)は、おおむね愛欲と憎悪を象徴している。例えば、ヴァルターが剃刀を拭うナプキンには「血のように赤い女の唇」(437)が印刷されている。また赤はウラの色でもある。彼女は赤いコートを身に付けており、以前はヴァルターもこれが気に入っていた(107)。これは明らかにヘートヴィクの白/緑と対比されている。

20 その午後にヴァルターは、ヘレーネのとときと同様に「血のように赤い」「きれいでまっすぐな線」(102)で、フルクラールの名前を給料簿から抹消するウラを目撃する。

21 テキストでは何度も、この一日(月曜)の長さが強調されている(99,125,127,141)。

22 従来の研究は、登場人物が白黒に分けられやすいベルの文学の「常識」に囚われて、この口紅の意味も、強引に肯定的に解釈しようと試みている。Vgl.Sone, S.72.

23 テキストは次の言葉で結ばれる。「相変らず月曜だった。私は自分が前進を望んではいないことを知っていた。私は戻りたかった。どこへかはわからない。ただ戻りたかった。」(141)この言葉は、『若き日のパン』の現実社会に対する後向きな姿勢を象徴するものとして批判的に引用されることが多い。しかし、これは現実の虚偽を告発しつつも現実の圧倒的な力によって主人公が挫折していく多くの「教養小説」(Bildungsroman)と同じ必然性によるものだろう。池田浩士：教養小説の崩壊(現代書館)1976、12-13頁参照。

24 ベルは「廃虚文学の承認」(1952)で、死者の記憶を胸に秘めた市井の人々を描くことが「廃虚文学」の仕事だと述べている(In: *Erzählungen, Hörspiele, Aufsätze*. Köln/Berlin (Kiepenheuer), 1961, S.339-343, hier S.341f.)。ここには現実の意味を転換するような視点が秘められている。この死者との連帯というテーマの射程を示すものとして、次のベンヤミンの言葉を紹介しておきたい。「過去には秘密の索引が付いていて、それは過去が救済されていく道筋を示している。実際に、過去の人々のまわりを漂っていた空気は、私たちにもふれてはいないだろうか。私たちが耳を傾ける様々な声には、いまでは沈黙してしまった声が反響してはいないだろうか。(…)そうすると私たちは、この地上で期待を担って生きているのだ。そうすると私たちには、過去の全世代と同様に微かなメシア的な力が付与されており、過去はこの力の行使を要求しているのだ。」(『歴史の概念』II) Benjamin, Walter: *Gesammelte Schriften*, I /2. Frankfurt a.M.(Suhrkamp) 1974. S.693f.

## Bölls "Das Brot der frühen Jahre"

von der verborgenen Funktion des Hasses in der bürgerlichen Gesellschaft

Shin KIMOTO

In "Das Brot der frühen Jahre"(1955) geht es um einen Montag in den fünfziger Jahren. An diesem Tag reflektiert ein junger Techniker, Walter Fendrich, in innerem Monolog über sein Leben. Die Misere der Nachkriegszeit wird im Text intensiv in seinem "Hunger" ausgedrückt. Diesen nennt er "etwas Wölfisches in mir". Nach der Erfüllung des Heißhungers durch den Wirtschaftsschwung wird der "Wolf" im geheimen zur Arbeitsmoral der Gesellschaft verinnerlicht: Im Arbeitsleben nimmt er oft daher bei sich einen wölfischen Haß wahr, der ihn zum Verdienen treibt. Im Laufe des Texts nimmt er aber anlässlich einer unerwarteten Liebesbegegnung mit einem Mädchen Abschied von allen Verhältnissen des Wirtschaftswunders: Im Augenblick der Begegnung wird er von einem Erkenntnisblitz getroffen, wobei ihm die Geheimkräfte der Gesellschaft als "Haß" klarwerden. Er kommt z.B. zur Erkenntnis, daß ein "roter Strich" auf der Lohnliste, der einen toten Mitarbeiter bedeutet, die Brutalität in der Industrie darstellt. Was ihn dazu führt, ist das "grellweiße" Gesicht des Mädchens Hedwig, das ihm fast als religiöse Gestalt erscheint. Es ist bemerkenswert, daß der Roman während des Aufenthalts Bölls in Irland entstand. Auf der Insel, die er mehrmals besuchte, begegnete er einer naiven Religiosität. Die Gesellschaftskritik hier ist also von irischer Perspektive bestimmt, die im Text von Gestalten wie Hedwig und Walters Vater vertreten wird. Am Ende des Texts hört Walter in der Phantasie den Todesruf der Kinder in Bethlehem, in dem jener Mitarbeiter auch mit schreit. Das deutet an: Hinter dem tugendhaften Schleier der Arbeitsmoral ist ein überhistorischer Haß verborgen, der im geheimen die bürgerliche Gesellschaft beherrscht.

---



---